

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第15回 伝統の持続可能性
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-08-15
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6242

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第15回

添えてあった。

事前に得た作品一覧には

私の予想に反し、算盤を

と置いていた。

「犬」とだけ記されたので、昨年「尾長鶏」のように、単に干支の戌(いぬ)を飾っているもの

巧みに組み合わせた愛らしい大型犬に、カフフルなプラスチック算盤のスカートをはき、目にして、思わず膝を打った。干支に話題のニュースを引っ掛けるとは思ってもみなかった。

横田では大市下組だけでなく、他の六つの常会も同様に、昨年と同じ材料一式を用いて新たな作品を飾っていた。毎年、少ない人手と限られた材料だけで、観客を飽きさせない作品を作り続ける、横田の人たちの発想の豊かさには脱帽である。

私は横田の「一式飾り」を見るたびに、フランスの人類学者レヴィ・ストロースが著した『野生の思考』を思い出す。レヴィ・ストロースはこの本の中で、南米の先住民の調査をもとに、持続的な循環型の社会について考察している。

「一式飾り」は、伝統として用いる方法で、「一式飾り」の「見立て」の趣向にも通じる。

「一式飾り」は、伝統として「見立て」の活用を制作者に求めてきた。このため、たとえ同じ材料を用いても、さまざまに見立てて組み合わせれば、また新たな作品を生み出すことが可能である。

今や「一式飾り」が伝わる多くの地域では、急速な高齢化と人口減少に直面して、伝統を続けていくことに不安を覚えている。しかし横田の「一式飾り」が示すように、創意工夫すれば、持ち合わせの材料だけで十分やりくりできる。

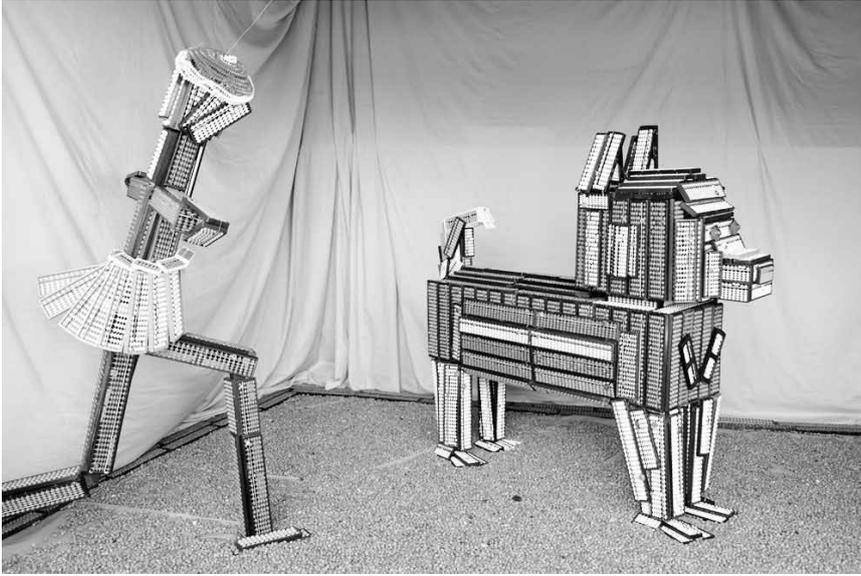
今年も夏祭りのシーズンが到来し、各地の「一式飾り」の調査に明け暮れている。炎天下を学生たちと歩いて巡るのは大変だが、思いがけない作品に出会うと疲れも吹き飛ばす。

先月訪ねた奥出雲町の横田で、そんな作品との出会いがあった。写真をご覧いただきたい。これは横田の「大市夏祭り」で飾られた作品である。連載の第12回で紹介した大市下組の人たちが、今年も町の特産品の算盤(そろばん)一式を用いて制作した。

写真には作品のタイトルが写っていないが、これは一体何の作品か、読者の皆さんはお分かりになるだろうか。

作品のタイトルは「ピョンチャンの想い出」。これだけでは分からない人がいると思っただけか、その横に「ザギトワとマサル(秋田犬)」と

伝統の持続可能性



レヴィ・ストロースは、持続性の鍵は「ブリコラージュ」にあるとする。「ブリコラージュ」とは、持ち合わせの限られた材料を、創意工夫して、さまざまに組み合わせ

「一式飾り」を続ける鍵は、制作者の機知と創造性にある。「見立て」の趣向を面白く感じる人間がいる限り、「一式飾り」の伝統は持続可能だと思っ。

江戶時代に始まったとされる「一式飾り」は、近代以降も各地で熱心に続けられてきた。戦時中でも知恵を絞って作品を飾っていたことが、平田の古い写真から分かる。

江戶時代に始まったとされる「一式飾り」は、近代以降も各地で熱心に続けられてきた。戦時中でも知恵を絞って作品を飾っていたことが、平田の古い写真から分かる。